

# 船橋

古名

佐野船橋

世阿弥作

季は	地は	ツレ	シテ	ワキ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
春	上野	女の靈	男の靈	前に同じ		女	男	山伏	

「山又山の行く末や。／＼。雲路のしるべなるらん。

詞

「是は三熊野より出でたる客僧にて候。我未だ松島平泉を見ず候ふ程に。此春思ひ立ち松島平泉へと急ぎ候。

道行  
「幾瀬渡りの野洲の川。／＼。彼七夕の契り待つ。

年に一夜はあだ夢の。醒が井の宿を過ぎ。胆吹おろしの音にのみ。月の霞むや美濃尾張。老を知れとの心かな。／＼。

詞  
「急ぎ候ふ間。是は早上野の国佐野と申す所に着きて候。此所にて宿を借らばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲  
「法に依る。道ぞと作る舟橋は。後の世かくる頼みかな。

シテサシ

「往事渺茫として何事も。見残す夢の浮橋に。

二人  
「猶数添へて舟ぎほふ。堀江の川の水際に。寄るべ定めぬあだ波の。浮世に帰る六つの道。遁れかねたる心かな。

歌

「恋しき物をいにしへの。跡はるぐと思ひやる。

前の世の。報いのまゝに生れ来て。く。心にか

けばとても身の。生死の海を渡るべき。船橋を作らばや。二河の流れはありながら。科は十の道多し。誠の橋を渡さばや。く。

シテ詞

「如何に客僧。橋の勧めに入りて御通り候へ。

ワキ詞  
「見申せば俗体の身として。橋興立の志。返すぐも優しうこそ候へ。

シテ  
「是は仰せとも覚えぬ物かな。必ず出家にあらねばとて。志のあるまじきにても候はず。まづ勧めに入りて御通り候へ。

ワキ  
「勧めには参り候ふべし。さて此橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ふぞ。

シテ  
「万葉集の歌に。東路の佐野の船橋取りはなしと。

よめる歌の心をば知し召し候はずや。

ツレ  
「いや左様に申せば恥かしや。身のいにしへも浅間

山。

シテ詞  
「漕がれ沈みし此河の。」

二人 「さのみは申さじさなきだに。苦しみ多き三瀬川に。  
浮ぶ便りの舟橋を。渡してたばせ給へとよ。」

ワキ詞  
「げにくく親しさくればの物語。さては旧りにし船  
橋の。主を助けん其為めか。」

シテ詞  
「殊更是は山伏の。橋をば渡し給ふべし。」

ワキ  
「そもそも山伏の身なればとて。取り分け橋を渡すべき

か。」

シテ  
「さのみな争ひ給ひそとよ。役の優婆塞葛城や。祈

りし久米路の橋は如何に。」

ツレ  
「たとふべき身にあらねども。我も女の葛城の神。」

シテ  
「一言葉にて止むまじや。唯幾度も岩橋の。」

ツレ  
「など御心にかけ給はぬ。」

二人 「さりながらよそにて聞くも葛城や。夜作るなる岩  
橋ならば。渡らん事も難かるべし。」

下歌

「是は長き春の日の。長閑けき水の舟橋に。さして  
柱も入るまじや。徒に朽ち果てんを。作り給へ山  
伏。

上歌

「所は同じ名の。く。佐野の渡りの夕暮に。袖打  
ち拂ひて。御通りあるか篠懸の。頃も春なり川風  
の。花吹き渡せ舟橋の。法に往来の。道作り給へ  
山伏。峰々廻り給ふとも。渡りを通らでは。何く  
へ行かせ給ふべき。

ワキ詞

「さてくく万葉集の歌に。東路の佐野の舟橋取り放  
し。又鳥は無しと二流によまれたるは。何と申し  
たる謂にて候ふぞ。

シテ詞

「さん候それに付いて物語の候。語つて聞かせ申し  
候ふべし。昔し此所に住みける者。忍び妻にあこ  
がれ。所は川を隔てたれば。此浮橋を道として夜  
なく通ひけるに。二親此事を深く厭ひ。橋の板  
を取り放す。それをば夢にも知らずして。かけて

頼みし橋の上より。かつばと落ちて空しくなる。

妄執と云ひ因果と云ひ。其まゝ三途に沈みはてゝ。

紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて。

「浮ぶ世もなき苦しみの。海こそ有らめ川橋や。磐

石に押され苦を受くる。

クセ  
「さらば沈みも果てずして。魂は身を責むる。心の

鬼となり変はり。猶恋草の言茂く。邪姪の思ひに

焦がれ行く。船橋もふるき物語。誠は身の上なり。

我跡弔ひてたび給へ。

シテ  
「夕日漸く傾きて。

地  
「霞の空もかきくらし。雲となり雨となる。中有一

道も近づくか。橋と見えしも中絶えぬ。こゝは正

しく東路の。佐野の船橋鳥はなし。鐘こそ響け夕

暮の。空も別れになりにけり。／＼。<sub>(中入)</sub>

「ふりにし跡を改めて。／＼。三宝加持の行ひに。

五道の罪も消えぬべき。法の力ぞ有難き。／＼。

ツレ「如何に行者有難や。徒に三途に沈みし身なれども。

法の力か船橋の。浮ぶ身となる有難さよ。

後ジテ「如何に行者我は尚し。此妄執の故により。浮びか

ねたる橋柱の。重き苦患を見せ申さん。泣く涙。

雨と降らなん渡り川。水増りなば帰り来るかに。

地「かへれやかへれあだ波の。

シテ「柱を戴く磐石の苦患。

地「これく見給へ浅ましや。

シテ「見我身者發菩提の。功力を受けて謂ふならく。奈落の底の水屑となりしを。知我心者即身成仏。有難や。

ワキ「痛はしやいまだ邪姪の業深き。其執心を振り捨てゝ。猶々昔を懺悔し給へ。

ツレ「何事も懺悔に罪の雲消えて。真如の月も出でつべし。

シテ「五障の霞の晴れがたき。春の夜の一時。胡蝶の夢

の戯ぶれに。 いでく姿を見え申さん。

ツレ 「よしや吉野の山ならねど。 是も妹脊の中川の。

シテ 詞 「橋のとだえの有りけるとは。 いさ白波の夜ごとに。

ツレ 「通ひ馴れたる浮船の。

シテ 「共にこがるゝ思ひ妻。 宵々に通ひ馴れたる船橋の。  
さえ渡る夜の。 月も半に更け静まりて。

地 「人も子に臥し丑三つ寒き。 川風も厭はじ逢瀬の向  
ひの。 岸に見えたる人影はそれか。 心うれしや頼  
もしや。

地 「互にそれぞと見々えし中の。 く。 橋を隔てゝ立  
ち来る波の。 より羽の橋か鵠の。 行き合ひの間近  
くなり行くまゝに。 放せる板間を踏みはづし。 か  
つぱと落ちて沈みけり。

シテ 「東路の佐野の船橋とりはなし。 親しさくれば妹に  
逢はぬかも。 執心の鬼となつて。

地 「執心の鬼となつて。 共に三途の川橋の。 橋柱に立

てられて。悪龍の気色に変はり。程なく生死婆婆の妄執。邪姪の悪鬼となつて。我と身を責め苦患に沈むを。行者の法味功力により。真如発心の玉橋の。く。浮べる身とぞなりにける。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第六輯」大和田建樹著